福岡県現代俳句協会会報

第63号

令和５年５月

福岡県現代俳句協会

会長　福本　弘明

コロナも一段落した様で、私たちの生活もやっと以前のような日常を取り戻しつつあります。

昨年度は、十一月十二日（土）に第五十九回現代俳句全国大会が北九州小倉のＪＲ九州小倉ステーションホテルで開催されました。

私も実行委員長としてコロナ禍の中での開催に戸惑いながらも、なんとか成功裏に終えることができました。小倉での開催は六年ぶりであり、実行委員の皆さん、協力していただいた福岡県現代俳句協会会員の皆さんに感謝をしたいと思います。

また今年は現代俳句協会にとっても大きな節目となる年です。以前から懸案であった現代俳句協会の一般社団法人への移行が決まり、各地区現代俳句協会と形の上で分離されることになります。これからは福岡県独自の活動や会員募集ができることになりました。

そこで、これまでの現代俳句協会員の皆様はそのまま福岡県現代俳句協会員として今まで通りですが、**新たに福岡県現代俳句協のみの会員の募集をすることにしました。**

県のみの会員は年会費千円だけです。会員には、この協会会報の送付と県現代俳句協会の行事の案内などをお届けします。他県の方でも賛同されれば自由に参加いただけます。

年会費千円なら参加してみようという人もあるかと思います。会員の皆様のまわりにそのような方があればぜひお誘い下さい。

令和五年度は、新しい出発の年になります。何卒、これまで以上のご支援ご協力をよろしくお願い申し上げますとともに、皆様のご健康とご健吟を祈念いたします。

第31回福岡県現代俳句大会

福岡県現代俳句協会総会および第三十一回俳句大会が、三月十二日（日）に北九州市小倉リーセントホテルで開催されました。

まず、十三時より総会。議長には大下真理子さんをお願いしました。

令和四年度の事業報告から会計報告、会計監査報告、そして、令和五年度の事業計画と予算案が承認されました。

特に今年は現代俳句協会が一般社団法人に移行するということで、福岡県現代俳句協会の会員に関する規約改正が承認され、県独自の会員を受け入れることが出来るようになりました。

旧規約

第二条　本会は、福岡県に在住する現代俳句協会会員によって構成する。

新規約

第二条　本会は、福岡県に在住する現代俳句協会員及び福岡県現代俳句協会の目的に賛同する者によって構成する。

総会の後、休憩をはさんで十四時より第三十一回福岡県現代俳句大会です。

片山副会長の開会の言葉で始まりました。

初めに福本弘明会長の挨拶です。

挨拶では、大会実行委員長として作年の十一月十二日（土）に北九州市小倉ステーションホテルにおいて開催した現代俳句全国大会への協力に対して感謝を述べ、続いて新しい福岡県現代俳句協会への参加と協力をお願い

されました。

その後、毎日新聞社事業部副部長の浅野翔太郎様と文學の森代表取締役社長の寺田敬子様より来賓祝辞を頂きました。

続いて、講演に移ります。今回は、講師に「さくら工房」代表の櫻本滿氏をお招きして「和風漢字」というテーマで話をしていただきました。

櫻本滿氏は西南学院大学で作家の葉室麟と同級生だったということ。

大和言葉が漢字という表意文字と出会ったことが日本人の豊かな言語環境を作ったということを、いろいろな例や落語の大喜利のような設問で楽しく学ばせてもらいました。

直接俳句に関わる話ではなかったのですが、言葉や文字を固定観念で見ずに、柔軟な発想や遊びの心をもって見れば、また新しい世界が生まれることを教えてもらった気がします。

櫻本滿氏の創作漢字

講演の後、休憩をはさんで俳句大会の入賞作品の披講と選者講評がありました。そして、表彰。

大会賞の川上泉さん

◈**大会賞**

シャガールの袋から出す大根かな　久留米市　川上　泉

◈**毎日新聞社賞**

セーター脱ぐ見知らぬ影をおくやうに　太宰府市　田中　葉月

◈**月刊「俳句界」賞**

ほどけゆく紐の先より春になる　太宰府市　山本　則男

〈**秀逸賞**〉

原子炉に火を入れたがる寒さかな　福岡市　小倉　斑女

「はい」といふ返事残して卒業す　北九州市　介地　部九

去年今年いらない棒は捨てっちまえ　北九州市　鍬塚　聡子

ロボットの膝しなやかに日脚伸ぶ　大川市　中村　和男

〈**佳作賞**〉

小鳥くる会話のような独り言　志免町　池田　康

まだやれるまだまだやれる冬帽子　北九州市　山本　悦子

降る雪が人に触れたがる雑踏　北九州市　大下真理子

寒卵あがつていけと声のする　福岡市　木村　厚子

クレーンのどこか目出たき初御空　福岡市　夏木　久

研ぎ師来て砥石に垂らす春の水　福津市　堤　明彦

百年後の妻へ投函青き踏む　北九州市　末次　正

戦争と疫病の世へ大根干す　福岡市　中西みつよ

級長と副級長と狸かな　北九州市　上野　一子

春立つ日二才の眼たじろがず　北九州市　倉迫　順子

嘘して後は平らな海である　北九州市　田中二史子

〈奨励賞〉

かぜひいたぼくにもごはんたべさせて　北九州市　瀧口　亮

参加者一堂に会して

「私と俳句」

上野　一子

三年間に及ぶ新型コロナウイルス感染症で私たちの暮らしは一変した。

テレビのニュースや、新聞は怖くて全く見ることができなくなってしまった。

句会が中止になった時期がある。また再開されても人との距離、換気、マスク着用と今までとは全く違う生活が始まった。

コロナ報道の恐怖の中でもマスクをして、寒い日でも窓を開けて換気しながらの句会が再開した。感染予防しながら句会をするということで不思議な連帯感があった。

またズーム句会というものもできてパソコンの画面を通して参加できるという句会も始まった。新しい句会のやり方として続けていきたいと思う。

私にとってこの三年間はとても息苦しい時期であったが、俳句があったおかげで乗り越えられたところも大きい。

ロシアのウクライナ侵攻も起きた。日本を取り巻く環境は油断できない。俳句が続けられる日本であってほしいと願っている。

――　アイ　ラブ　俳句　――

会員特別作品二〇句

「本音」　山本　悦子

好きなほう向いて三人日向ぼこ
かげふみの影に遊ばれ日脚伸ぶ
まだ動く柱時計や春隣
金太郎飴切ったはしから春になる
百人に満たぬ村から春になる
ペン先にあつまってくる春の川
フーテンの寅になりきる春の旅
花三分母に話せぬことのあり
さくらからさくらに傾く島の国
仙人の顔になるまで花の下
花の山むかし戸棚に征露丸
助手席は桜吹雪に空けておく
霾るや軍歌は父の子守歌
花辛夷いまもけんかのできる仲
葉桜になってゆっくり出す本音
青空に届く実のなる種を蒔く
苗床にずらりと並ぶ明日かな
出会いから幾年月やさくらんぼ
身ほとりを小さくまとめ夏に入る
太陽を探す一面のひまわり

「春耕」　中村　重幸

春うらら歩調あわせて老いを生く
グランドに硬球ひとつ春の雪
我が余生まだ余白あり春日射す
啓蟄や胸に畳みしこと多し
春隣無口の似合う画廊かな
手料理の薄味に慣れ春隣
一瞬の恋にざわつき辛夷散る
聴き役も夫の努めや朧月
空の青一気に染めて犬ふぐり
雑草と決めてはみたが犬ふぐり
地を這うて生きる余生や犬ふぐり
春夕焼鍬を洗いて軍手干す
土筆摘む止め時知らぬ昭和の子
春耕や余生の期待鋤き込めり
あっかんべ抜けども抜けども仏の座
花壇にも秘かな意地の仏の座
刹那さと少しの希望仏の座
振り向けば更地はビルに花は葉に
インバウンド異国語増えし春の風
卒業す人生新た髪染めて

一句鑑賞

彎曲し火傷し爆心地のマラソン　金子　兜太

この句に関しての評価はいろいろあるのだろうけれども「彎曲し火傷し爆心地」までの強烈な実景描写に対し「マラソン」を対置することによって、人間の「生」への営みの「賛歌」をも表現し得ているのではないかと、最近思うようになった。原爆の「惨禍」を背負いながらも黙々と走るランナー。駅伝であれば「襷」を繋いでひたすら前進する「人間の姿」。どんなに悲惨な状況であろうともそこから一歩を踏みだす人々。そこに兜太の「生きもの」感覚が息づいているように思う。

矢野　二十四

春愁という白うさぎ飼い慣らす　塩野谷　仁

何故白うさぎなのか。春愁という自己の内界に渦巻く何かの象徴として描かれているのは確か。出口のない靄の中にひとり佇ち、五感も方向感覚も失う時がある。そんな時無心に可愛い仕草でひょっこり現れて、ふわふわの背中をこすりつけてくるものが居たら。儚く小さな存在の白うさぎがやはりいい。いつの間にか緊張が和らぎ、ストレスに耐性が出来てくるかも。

田中　葉月

夏草や兵どもが夢の跡　松尾　芭蕉

三月初旬念願の中尊寺金色堂を訪れた。金色堂は堂宇全体を金箔で覆い「皆金色極楽浄土」を表現しているといわれる。また、金色堂は霊廟でもあり、藤原三代及び四代春衡の首が納められている。奥州平泉を訪れた松尾芭蕉が、当時の荒れ果てた金色堂を見て奥州藤原氏の栄華の儚さを詠んだ句とされている。

中村　和男

初明り稀代の悪女めく鏡　秦　夕美

掲句はわが畏友秦夕美女史の名句だと深く信じています。彼女は一月にご逝去なさりもうお声を聞くことも出来ません。最後の電話は去年十二月七日。あの声でとてもやさしく「斑女さんと友達で本当によかったわ」といわれました。数多ある秀句のうちで私は掲句が夕美さまの本音だと思う。

小倉　斑女

国産みの淤能碁呂島ゆ葦の生え　中島　芳昭

この句の淤能碁呂島は、古事記をお読みになった方には説明は不要であろう。七代の神の最後に生まれ出る男女の二神、伊耶那岐命と伊耶那美命に神は国造りを命じられ、天の浮橋に立って天の沼矛で眼下の潮を掻き回すと滴が垂れ固まって島になったのがオノゴロ島である。この島で二神は男女の契りをされて、次々に日本の国、大八島が産み出されたのです。海には葦が生えていました。古事記

は日本人の心の古里を知る壮大な神話。　中島　芳昭

「俳句」三月号特別作品

追憶を断つや一気に雪しまく　寺井　谷子

窓辺の主宰は降りはじめた雪に目を凝らし、様々な雪との想い出を脳裏に浮かべられている。雪はだんだん激しくなる。主宰の哀しみのお気持ちを考えた時言葉に絶する。今、私が一番感動した一句。　川原　昌子

諸家近詠

水草生う鰐の全長隠るまで
水草生う払い鎌して牛の餌に
牛の声山羊の声聞く春霞
観音の見下ろす町や春霞
潮まねき招くは月の兎どち

池田　康

足音の力強さよ畦青む
虫出しの雷我には構ふなよ
たんぽぽの絮長すぎる待ち時間
風船を放つ手平和で青い空
忘れずに今年も薫る沈丁花

安徳　由美子

倒木の折り重なって故郷の冬
走る型して坂上る空っ風
生人参盛りて夕餉を明るうす
歩くため歩く二重のマスクして
一束の本を処分す冬日和

松岡　耕作

あちこちに恋の鞘当て春の山
坊守に婚の相談春彼岸
花の雲橋の向かうは穢れなき
朧月ゆたりゆたりと帰り舟
幾重にも浜に風紋鳥雲に

五条　星天

春の川ややにもふかき生命線
山国の月は代田を上り行く
やさぐれて鼠花火となりにけり
冬瓜のポーカーフェースばかりなり
手土産に初東風つれて漢来る

矢野　二十四

西の魔女とならむ林檎は真紅に
赤、青、金の葉よフレデイよ冬木の芽
団塊のひたむきに生き水仙花
行先は十万億土つづみ草
それは伝家の宝刀か芽木の風

吉田　玉

救急車くる度ウグイス窓のぞく
黄水仙得意なカメラ視線もつ
夕桜声の大きは親ゆずり
介護士の交替時刻　燕鳴く
眠れない春夜のベッド　舞い上れ

上月　大輔

昼休みバレンタインのチョコ渡そ
朝が来てすぐ晩が来て猫の恋
透きとほるまで窓みがく椿かな
春昼のめがねのくもりやすきかな
先生の遠くなりたる春ショール

土田　利子

二百個の骨多すぎて夕櫻
朝櫻おまけにどうぞ青い空
鳥曇りとどのつまりの鼻詰まり
ブリジッド・バルドーあたりの江戸彼岸
ミモザミモザいっしょにごはんたべませう

鍬塚　聰子

花冷えのピカソの青が狂いだす
娘生まる憲法記念日の混沌
初夏へ潮の香纏う一両電車
乳せがむ嬰児冬日が加速する
陽よ海よ輝け嬰児の春へ

宮本　千賀子

夕陽ごと抱へて根深ひきにけり
椿一輪おく「夕月譜」の側に
竜天にホスピスの窓全開に
目を閉じる紋白蝶の国にゐて
春愁のゆるる吊橋ファルセット

田中　葉月

啓蟄やかんちがいからはじまりぬ
象の目尻の皺や春泥きらきら
あしうらに象の踏みたる春の泥
草を焼く匂い人間焼くにおい
春一番おちょぼ口して受けて居る

岩坪　英子

着ぶくれて問診に書く嘘ひとつ
取説を駆け回りたる余寒かな
鳥雲に初心者マークが揺れている
春よこいとう唄ありし3・11に
春塵をまといて生活支援バス

中村　和男

紅つばき未練などなき彩をして
履き物をそろえ椿にもどります
夢ひとつ追いし椿の音をたて
椿にも帰る大地のありにけり
落椿なおも火種になりたがる

三舩　熙子

電線の引き合う音や春一番
春の虹消えるまで見て庭を掃く
春だねと庭の花木に声かける
縁側に子猫ころころ雨止まず
送迎のバス待つ母や春兆す

福原　弘子

福豆は升に山盛り定食屋
茎立の空へ足場の組み上がる
白鷺の春に躓くように降り
春眠しビルは互いを映し合い
あたたかや皇居の森のだんご虫

中西　みつよ

どうしても春の頁が見つからぬ
春愁の抜けだしてゆく薬指
大空の奈落知りたる揚雲雀
流れ着くものより蝶に成りすます
向かうから声のしてゐる桜かな

山本　則男

片肩の二十才の匂ふ歩射祭
早笛に吹かるる如くさくら散る
くちなはの胴のよぎりし草そよぐ
宿り木のあをさまろさや巣音鳥
春月に触手伸びゆく珊瑚かな

小倉　斑女

パントマイムは春の深さをはかりかね
土筆摘む一汁一菜旨として
白木蓮パンドラの髪結いあげて
タンポポの綿毛吹いているパンドラ
春の気分まのびしているのはくれそん

大下　真理子

とまり木はいつも右奥花ミモザ
置土産の種をふたつぶ鳥帰る
晩学の回路ゆるやかつばくらめ

水城　千恵子

白障子の淡き日の詩一休椿
鈴虫の闇を原発再稼動
幼日の貧の最高赤とんぼ
畦道の影のつめたい犬ふぐり
にんげんをセシウム無臭春彼岸

鳥巣　徳子

春や春ペッパーミルのヌートバー
服を着し子犬いやがる春の雨
考妣（ちちはは）や野萱草の芽の小鉢

広瀬　邦弘

若松南海岸通り風光る
独り言多くなりたり春の土
足洗う女まぶしき康成忌

原田　俊子

夜桜やくノ一我を刺しにくる
春浅しいつも陽気な育毛剤
回り道抜け道だらけ朧の夜
風呂敷に春を包みて異端なり
嗚呼またも言葉足らずか春灯

福本　弘明

白寿祝う今年も咲けり犬ふぐり
菜の花を供え仏壇華やがす
ひとりだけ見るには惜しき夕桜
白寿祝子の帰省待つ花菫
桜満つ一人居既に十九年

宮原　安徳

早春のキャリーバッグが迷走す
平和なる春の重さよ膝の猫
風船を撃墜せんや鳩発ちぬ
三月十一日黄砂に見えぬ故郷の山

片山　亀夫

ふらここや師は天界の風となり
空港の吾も異邦人おぼろ月
金平糖の蠢く角よ芽吹山
卒業子余白の行を探す旅
蜷の子や方向音痴の家系です

山際　はるか

春の宵銀河鉄道モノレール
蝶ひらひら男ぶらぶら夕暮るる
平方根開いて蛇が穴を出る
散り際をこぶしの花に習いたし

中島　直四郎

腕組みの思案の年長児うらら
地下鉄が二駅伸びて花盛り
花万朶マスクする人せぬひとも

本多　進

核融合の発電急げ春の海
花爛漫ころげはしゃぎて立つ地蔵
宇宙船速し春宵の松の上

影浦　ようじ

皺の手で飾る雛(ひいな)の手の白し
春の航尾鰭の長い話好き
春立つやパッチワークとなる余生
フランスパン抱えて歩く桜東風
ペッパーミルやる気出るでる木の芽どき

堀川　かずこ

凧揚の凧の世界へ糸伸びる
頭の中で流氷ごつと反響す
春昼のうしろ歩きは鳥居まで
たんぽぽの絮の生死はこの風に
シャンソンは久しく聴かず花ミモザ

大瀬　益太郎

春霞マスク解除も踏み出せず
水鳥の番の水脈や風光る
老桜や今絶調期まだ散れぬ
種芋を信じ優しく土に埋め
収穫の音を選んで種袋

中村　重幸

恋情は老いこそよけれ春の潮
国産みの淤能碁呂島ゆ葦の生え
戦場は命の接ぎ穂春日遅々
春一番当てなき人の吹きだまり
長生きの家系にあらん山笑う

中島　芳昭

夕美さんを弔う
会えぬまま永久の訣れや霙降る
問えば閉じしどろもどろと春霞
愛国に哮る翔平春弥生
無洗米に洗い癖のあり花明り
胸を打つ称えの弔辞百千鳥

中村　勝子

仏に届く「御池煎餅」喪正月
「御池煎餅」「木賊煎餅」京は雪

寺井　谷子

凍てる夜P・K戦の非情しる
麗らかや家族を繋ぐ断髪式

川原　昌子

桜満つ侍ジャパン子等へ夢

香山つみれ

オーイ雲よ彼岸の入りまで待ってくれ
牡丹咲き築五十年の軒傾ぐ
桜散らし一斉に雀去る
気疲れに花菜漬添え一人酒
鞦韆こぐ山の向こうの未来まで

高尾かつよ

微熱あり口に残りし蕗の薹
生垣の葉ごしに小さき紅椿
菜の花の黄色白色遠賀土手

中川屺城子

イージス艦やたらに尖る蕗の薹
更紗木瓜あっけらかんと国を売る
五線譜やお玉杓子がそっぽ向く
虫出づる快眠快食歩を伸ばす
啓蟄やブリキの玩具に出る予定

森　さかえ

言霊は春に育つと思はれる
ある日ふと正気にもどる桜かな
未来よりのぞく世界やチューリップ
下流には澱んでゐるらし春の水
かりの世をラインでつなぐ蝶の昼

会員句集紹介

「蓮の糸」安徳由美子

編集部抄出

ひこばえぬそのしばらくをきれいな雨
春一番二番三番機を織る
夜が来てまた朝が来て水温む
揚雲雀うそ八百を並べたる
立ち位置の判らずにゐて春はやて
春惜しむ長い手紙となってゐる
それぞれが見てゐる奈落花月夜
死ぬといふ選択肢もあり月涼し
糸蜻蛉動けば水の影もまた
ゆるゆると流るる時間白雨来る
目印は石榴の割れてゐるあたり
ふりむけばそこに死がゐる秋の海
どちらまで秋の始まるあたりまで
新しいことなんにもなくてお正月
春隣手持ちぶさたのこの両手

「雲」秦夕美

編集部抄出

水雲召す兜子は何処師は居ずや
焦土には少女と夕日にほふ秋
贅沢は素敵戦後の秋は好き
あたふたと彼の世此の世や雲と露
夢のまたゆめも銀河も雑嚢に
包帯を洗ふ良夜でありにけり
熟田津は月待つ汝は我待つか
魔王よぶあっけらかんと雪がふる
深くしづかに潜行するか蟹と老い
風鈴やどくろは舌をもたざりき
そらにみつ大和うるはし終戦日
臘梅や老といふ字のやうに老い
ももさくら死や死や汝をいかにせむ
背投げしたき病や諸葛菜

※秦夕美さんのご冥福をお祈りします

《会計からのお願い》

※令和5年度年会費（一千円）のお済みでない方は納入をよろしくお願いします。

納入は同封の振替用紙でお願いします。

なお、前年度の分が未納の方は併せて納入お願いします。

（会計　上野　一子）

福岡県現代俳句協会会報

令和5年5月（63号）

発行人　福本　弘明
編集人　森　さかえ
発行所　福岡県現代俳句協会事務局
〒839-0223　みやま市高田町岩津299
森さかえ方
Tel. 0944-22-5332　Fax. 0944-22-2530
印刷所　三池印刷